

## 腰椎疾患データベース作成と運用についての報告（第一報）

小林洋輔 山内秀文 小林将貴 溝口雅史 清水亮祐  
小林祐介 平嶋真悟 横溝拓実 古川幸治 新谷雅樹

【はじめに】当院では脊椎内視鏡下手術が平成25年11月までに5000件以上行われている。術前術後に、医師、理学療法士、看護師、SEがチームとなり、自記式質問票、問診、理学所見、画像所見、検査所見などの評価を実施している。今回、我々は、これらの情報、所見から治療成績・効果判定を正確に実施し、かつ将来の腰椎疾患治療のモデルケースを作製する礎となる「腰椎疾患データベース」を作成したので、その運用も含めて報告する。

【対象】当院で腰椎内視鏡下手術を施行する患者

【方法】データベースの内容は自記式質問票と診察所見により構成されている。自記式質問票はZCQ、RDQ、NSR、ODI、BS-POPなどを用いて独自に作成したものを使用し、JOABPEQ、ロコモ25などを追加した。診察所見は、①基本情報（診断名、術式、手術高位、再発の有無など）、②理学所見（筋力、関節可動域、反射、知覚、整形外科徴候など）③画像所見（MRIによるヘルニア、狭窄の原因、程度など）④検査所見（ABPI、SNAP、血液検査）などがあり、できる限り各項目を数値化し、入力していく。

【運用までの流れ】平成25年12月にデータベースを完成させ、運用（入力・分析作業）を開始していく。以前から蓄積したデータは、一旦CSVファイルに取り出し随時データベースにコンバートしていく。

【まとめ】今回作成したデータベースは術前術後の自覚症状、理学所見、監査所見などの経時変化の把握や、症例をタイプ別に区分研究することができ、リハビリテーションのスキルと精度を向上させることが、今後大いに期待できる。